



おおいた人権フェスティバル2025

人権作品集



大分市 大分市教育委員会

はじめに

全ての市民は、一人一人がかげがえのない存在であり、その人権は等しく尊重されなければなりません。大分市では、「市民一人一人が互いに人権を尊重し合い、共に生きる喜びを実感できる地域社会の実現」を目標に、あらゆる差別の解消に向け、学校教育や社会教育の場で積極的に人権教育に取り組むことにより、人権が尊重されるまちづくり「人権のまちづくり」を推進しています。

このような中、大分市・大分市教育委員会におきましては、市民参画による人権啓発事業として、一九九九（平成十一）年より「おおいた人権フェスティバル」を、年間を通して開催しており、市内小・中学生及び高校生を対象に人権作文・標語・ポスターを募る「人権作品コンクール」もその一つになります。今年はこの「人権作品コンクール」に、小学校から一、〇六〇点、中学校から三五九点、高等学校から三四点、計一、四五三点の応募をいただきました。自分の生活を見つめたもの、身の周りの出来事や社会問題に鋭い視線を注いだものなど、その内容は様々で、どの作品も豊かな感性と鋭い人権感覚を感じることができる素晴らしいものでした。その中から、人権作文の部で

二七点、人権標語の部で三〇点、人権ポスターの部で二四点が入選され、それらの作品をまとめたものが、この『人権作品集』です。

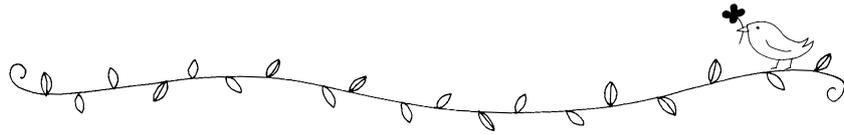
お互いの人権を尊重し合うためには、日常生活や社会の中にある不合理や偏見、差別を見つめ、その解決のために自分に何ができるのかを考え、行動していくことが重要であり、そのためには、学習を通して人権感覚を磨くことが大切です。

この『人権作品集』が学校教育や社会教育、さらに家庭や地域において活用され、人としての生き方を問うきっかけとなり、差別のない誰もが住みよい明るい地域づくりにつながることを期待しております。

結びになりますが、入選されました皆様にお祝いを申し上げますとともに、ご応募いただいた皆様、ご指導いただいた先生方に心からお礼申し上げます。

二〇二六（令和八）年二月

大分市・大分市教育委員会



も く じ

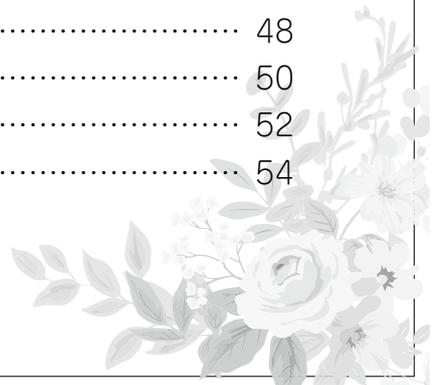
人権作文の部	1
人権標語の部	57
人権ポスターの部	61





人権作文の部

なかよしのくらすになりたいね	2
ことばってすごい	4
ふわふわとちくちく	6
みんなが気もちよくすごすために	8
ことばのパワー	10
自分の好きをさがしてみよう	12
あの日の悲しみといかり	14
人見知りなわたし	16
みんなしあわせ	18
みんなちがうからおもしろい	20
男らしく、女らしくは関係ない	22
笑顔をふやそう	24
共に生きるためには	26
空気	28
言葉の使い方	30
この夏、一人の女性から学んだこと	32
今、自分ができることを	34
ぼくの将来	36
メガネをかけることは当たり前のこと	38
違いの向こうにある笑顔～ウクライナの友だちとの出会い～	40
言葉は心にきざまれるタトゥー	42
僕に出来ること	44
バリアフリーの大切さ	46
思いやる気持ちと助け合う心	48
母の耳、私の気づき	50
共に生きる社会	52
心をつなぐ思いやり	54



ながよしのくらすになりたいね

なつやすみのべんきょうで『かお』というおはなしをよみました。

わたしがうれしそうなかおになるときは、おとうさんがおもしろいことをしたとき、おいしいものをたべたとき、おかあさんのおりょうりをたべるとき、おとうとがわらうとき、ともだちがいっしょにあそぼうっていつてくれたとき。

わたしがなきそうなかおになるときは、おとうとにたたかれたとき、おかあさんがぶんぶんおにになったとき。

わたしがおこったかおになるときは、おとうととけんかをしたとき、おもいどおりにならないとき。

きょうのきゅうしょくじゅんびのじかんに、Aさんがなくてしまいました。きゅうしょくとうばんのぺあのがおやすみだったから、だれかにてつだってほしかったのに、だれもはなしをきいてくれなかったそうです。

くらすのみんなで、どうしたらよかったのかをかんがえました。

ひとにはうれしいときやなきたいとき、おこり
たいときなどいろいろなおがあります。だから、
いやなことがあったら、がまんしないでおともだ
ちにはなしていくといいね、とはなしていました。
ないたり、おこったり、しょんぼりしたりして
いるおともだちがいたときは、「なんでないてい
るの」「たがいしょんぼり」「してだってあげるよ」「な
んでおこってるの」ときらてらきたいね、とは
なしていました。そしてわたしがないたときも、
おなじようにはなきをきらてもいらたがです。
そうしたらわたしたちのへらすは、いまより
もっとやさしくなかなかよこへらすになるとおも
います。



いよびつすがい

「おかあさんじゃなくて、〇〇くんのおかあさんからうまれてくればよかったな。だってやさし
そうだもん。」

あるひぼくは、おかあさんにこういった。おか
あさんは、すごくかなしそうなかおをしていた。
ぼくはすぐにあやまった。おかあさんは、

「あやまったら、なかなかおりはできるかもしれ
ないけど、あやまっても、いってしまったことば
はそのひとのいじろこのこりつづけられるんだよ。」
といった。たしかにそうだとおもった。

ぼくはようちえんのとき、おともだちにてがみ
をもらった。それをよんだとき、とてもかなしい、
いやなきもちになった。

「ねんもまえのことだけど、まだおぼえている。
そのこがバスでいっしょにすわろうとやくそくし
ていたおともだちのとなりにも、ぼくはしらずにす
わってしまった。どいてといわれたけど、ひとが
おおくなってきたからぼくはどけなかった。それ
で「くず・バカ」とかかれたてがみもらったのだ。
とてもとても、いやなきもちになった。かなしく

「さっしゅめいせい。」

「やだ。」

「ともだちにいわれました。そういわれると、
もっしゅめいせいもなまじです。」

「ふわふわことばとちんちんことばでは、ふわふわ
わことばがすてきなことばです。たったひとつの
ことばで、きもちがうれしくなったりかなしく
なったりします。そのことばをしかつかえらぶの
は、たいせじだとおもいました。」

もし、ちんちんことばをさっしゅめいになってし
ましたら、めんかえがえしてふわふわことばになお
しゅめい。

「ふわふわ」さっしゅめいせい、「さっしゅめい」

てね」さっしゅめい。「さっしゅめいせいせい、
「さっしゅめいせい」になおしゅめい。

めんがふわふわことばをしかえば、あつてもふ
わふわことばをしかいたくなります。めんがちん
ちんことばをしかえば、あつてもちんちんことば
をしかいたくなります。おなじことばがかえって
きます。ふわふわことばもちんちんことばもど
んかえっていきます。

だから、ふわふわことばをしかつしゅめい。
ともだちにもふわふわことばをしかつしゅめい
す。

みんなが気もちよくすごすために

お友だちができるかな。二年生のはじめの日、わたしはふあんなきもちで新しい教室に入りました。そんなきんちようしているわたしに、声をかけてくれた人がいました。

「友だちになろう。」

一人の新しいクラスメイトが言ってくれた言ばをきっかけに、このクラスでよかったとすこしあんしんすることができました。だから、そんなやさしい友だちと、毎日会えない夏休みに、友だちとなかよくすごすために大じなことについて考えてみました。

まずはじめに思いついたのは、ルールをきめることです。わたしは一学きに、友だちとおにっこをしていました。はじめは、にげてよいはんいをきめずに、あそんでいました。すると、おにかなかつかまえられずに、ずっと同じ人がおにをしてしまいました。わたしたちは、

「それだとおにさんがたのしめないよね。」

と話し合い、ルールをきめることにしました。にげてよいはんいをせまくして、みんながこのルールをまもると、おにがタッチできるようになり、もっとたのしくあそべるようになりました。

ルールをまもることはもちろん大じだけど、みんなが同じだけたのしくあそぶためにルールがひつよだというりゆうに気がつきました。

つぎに思いうかんだのは、言ばのえらび方や話し方です。私は一学きに、名まえをちがうよび方をされて、いやな気もちになったことがあります。これは、なかよくなるためのニックネームやあだ名のつもりだったのかはわかりませんが、わたしはじぶんの名まえが大すきで大切なので、かなしくなりました。なので、友だちの名まえは正しくよぶことが、なかよくなるために大じだと思いました。また、言ばが口から出る前に、その言ばは人をきずつけないかもよく考えたいです。わたしは友だちにちゅういをしたときに「ばか」と言われたことがあります。その友だちは、ちゅういを

されて、いやな気もちになったから、つい「ばか」と言ってしまったそうです。ちゅういする方も、される方も気もちよく同じ教室ですごすために、つたえ方、言ばのえらび方をしんちょうに考えないといけないと思いました。

これらの二つのことをわすれずに、一学きも、友だちとなかよくすごしていきたいです。

さいごに、わたしはこれからどんなふう用友だちとすごしていきたいか考えてみました。ルールをまもって、チクチク言ばをつかわなかったら、クラスのみんなが気もちよくすごせると思いますが、じぶんがたのしくすごすだけでなく、みんなが同じがいやな思いをしないだけでなく、みんなが同じだけ、あんしんして気もちよくすごせる、そんなクラスにしていきたいです。

ことばのパワー

わたしは友だちとけんかをしたことがありません。わたしの方からいやなことをして、友だちが、わたしのことを、

「きらい。」

と言って、きらいになりました。わたしは、とてもごまりました。大しん友と思っていたのはその友だち一人だけだったからです。おうちにかえってから、ずっと「いやなことを言わなかったら、またあしたもあそべたのにな。」とよるまで、モヤモヤしてしまいました。

よく朝学校に行くと、友だちがほかの子となかよくなっているのを目撃しました。メンコやお

り紙をいっしょにして、とてもたのしそうにしていました。わたしも入りたかったけど、にらまれそうなふんいきだったので声をかけることができませんでした。

その後も、なかなか話しかけることができませんでした。わたしはずっとさみしい思いをしているのに、友だちの顔を見ると、「わたしにはほかにも友だちがいるから、もうあなたとはあそべなくても、どうでもいい。」と語っているようにみえて、ますますふあんになってきました。

ひる休みになって、なかなかおりできるかすごくこわいけど、ゆう気を出して、声をかけました。

「ごめんなさい。わたしけんかなんてしちゃって
本当にごめんなさい。またいっしょになかよくし
よう。」

ドキドキしながら、友だちの顔をみると、友だ
ちも、

「わたしもごめんなさい。きらいなんか言っ
わたしもごめんなさい。またいっしょにあそんで
いいですか。」

わたしはうれしくなりました。また、いっしょ
にあそべるのがすごくうれしくなりました。友だ
ちもわらっていました。

それから、その友だちとはずっとなかよしで
す。でも、あの時言われた「きらい」ということ
ばはわすれられません。わたしもその時「きらい
と言ってしまったので、きっと友だちもわすれら
れないと思います。」

「きらい」というたった一言で、ずっと心にの
こるきずをつけあってしまいました。

でも、「ごめんね」でなかなかおりました。
いいことは、けんかをしていても、いっしょん
でなかよしにもどしてくれました。

わるいことばはけんかになるけど、いいことば
はなかなかおりました。言われたらうれしくなる
パワーをもっています。これからわたしは「き
らい」みたいに人をきずつけることばは言いません。
「いっしょにあそぼう」「や」きてくれてありがと
う、「大すきだよ」など、じぶんも友だちもうれ
しくなることばをいっばいつかいていきたいで
す。

自分の好きをさがしてみよう

わたしのしょうらいのゆめは、小学校、ようち園やほいく園の先生です。そのほかにもかみの毛をきれいにそめて、自分の好きなものをみにつけた「ギャル」にもあこがれています。

おとなになってからのゆめを友だちに話しました。すると友だちから、わたしには金髪やピンクの髪の毛にはあわないからやめたほうがいいよと言われたり、心がきずつくことを言われたりしました。

それから、わたしが虫のおようふくをきていた

ときのことです。そのとき、

「なんで男の子のおようふくをきてるの。かわくないからやめたほうがいいよ。気もちわるいよ。」

と言われました。わたしは、虫のおようふくは女の子でも男の子でもどっちがきてもいいのに、なんでちがづかないでと言うのかな、なんで男の子のおようふくをきちちゃだめなのかな、と思いました。

わたしは、男の子のふくを女の子がきてもいい

と思います。もちろん男の子も女の子のふくをきてもいいと思います。ピンクやお花は女の子、青や虫は男の子、そんなふうにきめなくていいと思います。わたしは、みんな自分の好きにしています。わたしは、みんな自分の好きにしています。と思います。

もし、だれかにきめつけられたりして自分の好きなものをきられない人がいたら、わたしは人それぞれみんな好きなものはちがうから、自分自分で生きていったらいいよ、と言ってあげたいです。

みなさんは、なんて言ってあげたいですか。あいてがうれしくないこと葉を言われていたとき、なんて声をかけてあげたいですか。それとも手紙

で気持ちをつたえてあげたいですか。

だれにだって、かなしいときやくるしいときはあります。そのときは、自分の好きをいっぱいみつけて、たくさん元気をもらってください。



あの日の悲しみといかり

ぼくは、ふたごです。生まれたときからずっと
いっしょです。なががいい時もあるし、もちろん
たくさんけんかもします。

ずっといっしょだった相方とべつべつになる時
がとつぜんきました。それは原いんがわからない
けど、目のしんけいの周りがはれるびょう気に
なった時です。そのびょう気もなかなかわからず、
わかる間も相方は目がいたくて、夜中なっていた
けど、ぼくは心の中で「うるさいな」と思ってし
まいました。

やっと、びょう気がわかって入いんしないとい
けないとなって、ぼくははじめて相方とべつべつ

にすぐすようになりました。ぼくはすこしだけさ
みしかったです。

たいいんしてきたら、とてもうれしくて、ずっ
とついてまわっていました。相方は、ちりょうの
ために、くすりをのまないといけなくなりました。
そのくすりは長くのむと、顔がパンパンになるふ
くさようがありました。相方は、だんだん顔が丸
くなっていきました。そうしたら、ぼくと同じク
ラスの子が相方のことを、「ぶくぶくちゃん」と
よんでいました。その時は、相方とべつのクラス
だったので、そうよんだ子が入いんしたことを知
らなかつたかもしれませぬ。だけど、ぼくはとて

もはらが立ちました。一とだけ相方をそうよばないでと言ったけど、しばらくくよんでいました。

その後、道とくのじゅぎょうで、「人の見た目のことだなにか言っではいけないよ。」ということごとを勉強しました。

相方はその見た目になりたくてなったわけじゃありません。今は、べつのくすりものんでいますが、そのくすりは毛がこゆるそうです。今のぼくとまゆげやまつげのこさがちがうので、見た目があまりになくなりました。かみを切りに行つたときこ

「ふたごにてないね。」

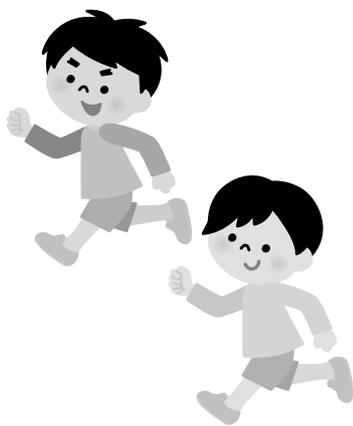
と、言われました。どうしてふたごはそっくりと決めつけるのかなと思いました。

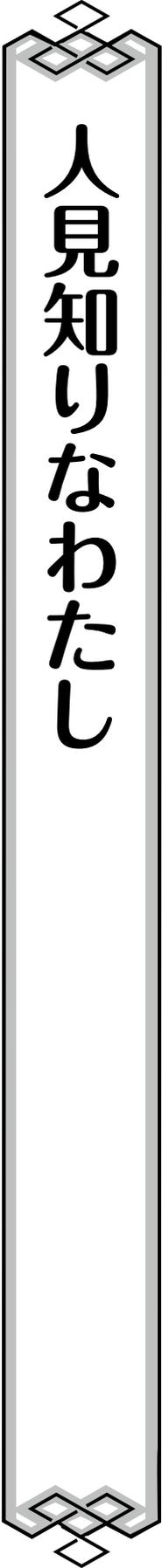
ぼくは、夏休みとかいっしょに行けるときは、

相方のびょういんについて行くことがあります。大きなびょういんではいろいろなかんじゃさんがいます。見た目だなにか言われたことがある人もいるかもしれません。

ぼくは、自分が言われたらいやなことはぜったい言わないようにします。

見た目でいじったり、あだ名をつけたりするのは、言われた方は悲しくなるから、見た目ではんだんしない人がふえたらいいなと思います。相手の立場になって、行動できるように、ぼくも気を付けてすごしたいです。





人見知りなわたし

「一しよに遊ぼう。」

わたしが三年生になったばかりのころ、友だちが声をかけてきました。わたしは、人見知りです。人と話すのがすこしにがてです。でもそのときは、うれしかったです。心の中がぽかぽかして、にこにこしてしまいました。声をかけてくれたのは、一年生のときにいっしよの組だった友だちでした。でも、二年生のときは、ちがう組になってしまった。あまり話さなくなってしまいました。だから、三年生になってまた声をかけてもらえて、

とてもうれしかったです。その子となりになっていた。私も、いっしよにあそんでくれました。そのときから、友だちが一人ふえたと思います。

声をかけてもらえて、わたしの中でなにかがかわったような気がしました。わたしは人見知りです。知らない人に声をかけるのは、少しこわいです。まちがえたらどうしよう、きらわれたらどうしよう、そういう気もちがあるからです。

そして、なぜ人見知りなのかというと、人にめいわくをかけたくないからです。でも、人に声を

かけてもらったとき、わたしもだれかに声をかけてみたいと思いました。

そこからドキドキしたけれど、

「いっしょに遊ぼう。」

と、わたしから言ってみました。そうしたらその子が、

「うん。」

と、言ってくれました。そのときのわたしの気もち、うれしい気もちでいっぱいでした。

わたしは、いままでよりも少しだけゆう気ができました。声をかけるのは少しこわいけれど、かけてみたら友だちになれるかもしれない。そう思ったら、がんばってみようと思えます。

そして、声をかけたらほかの友だちもいっしょに遊ぶようになりました。三年生の一がっき、わたしの友だちはふえました。声をかけたただけでなく、かよくなれることもあると思うとゆう気が出ます。わたしが声をかけられたときのぽかぽかをわたしもほかの人に分けてあげたいです。



みんなしあわせ

人けんとは何だろうと考えました。

「すべての人がしあわせであるけんりのことだよ。」

と、お母さんが教えてくれました。

わたしは、人けんについてもっと知りたくなつて、図書館へ行きました。そして、『わたしのすきなやりかた』という本をかりました。すきなやりかたという言葉が気に入ったからです。

この本の中のお母さんは、毎日子どもの食事の用意をしたり、お風呂に入らせたり、コツコツと音楽の練習をしたり、とてもいそがしそうです。もしわたしだったら、いそがしすぎてつかれてし

まいそうです。でも、このお母さんがたいへんだけれど、自由に楽しそうに見えるのは、きっとこのお母さんが自分のすきなやりかたで子どものお世話をして、すきながっきの練習をしているからだと思いました。

わたしは、この本の中で「すきなことを「コツ」ツともかく練習」というところが心にのこりました。この本を読み終わった後、「自分のすきなやりかたで楽しくしているってうれしそう。わたしにもそんなことがあるかな。」と考えてみました。

わたしは今、ピアノを習っています。一つのきよくをおぼえてひけるようになるのは時間がかかり

ます。でも先生が、

「上手だね。じょうかく。」

と、やさしい言葉で楽しく教えてくれます。だから、お母さんに

「練習しなさい。」

と言われなくても、自分のすきなやりかたで進んでピアノの練習をコツコツがんばることができのです。そして、ひけるようになった時、だれかに言われてすることよりもずっとずっとうれしい気持ちになります。だれでも自分のすきなことを自分のすきなやりかたでできたら、しあわせになれると思います。

でも、世界中には、せんそうやびょう気などで自分のすきなことすらできない人がいると知りました。日本でも、いじめで学校に行きたくても行けない人もいます。わたしはそんな世界で

は悲しいなと思いました。だれもが、自分がすきなことがすきなやりかたでできたなら、みんながうれしい気持ちになってしあわせになれるだろうとそうぞうしました。

そのための第一歩として、わたしにできることを考えました。もし、こまっている友だちやさびしそうにしている友だちがいたら、

「だいじょうぶ？」

「いっしょに遊ぼう。」

と、声をかけて仲よくなりたいです。相手の気持ちを考えて、おたがいによい気持ちでいられる言葉を使いたいです。これからも、みんなとえがおですごせるように、自分ができることをがんばっていききたいです。

みんなちがうからおもしろい

わたしは、大阪万博に行ってきました。会場では世界中から

たくさんの人たちが集まっていて、とてもわくわくしました。

その中でも、クウエートパビリオンでの体験がとても心に残り
ました。

クウエートパビリオンに入ると、さばくのすながてんじされ
ていました。本物のすなだと知って、とてもおどろきました。
すなまで持ってきていることに、「クウエートの人たちにとっ
てさばくはとても大切なんだな。」と思いました。国によって
大事にしているものがちがうのだと感じました。

次にぬのやわたのてんじがありました。そこで案内してくれ
た人が、日本語も使って伝えようとしてくれているのが、とて

もつれしかったです。言葉がちがっていても相手に伝えようと

する気持ちがあれば、心はつながるんだなと思いました。

さらにダンスを体験できるコーナーがありました。

「やってみない？」

と声をかけられ、さい初は、はずかしくてことわろうかと思
いました。でも、思い切って参加してみました。まねをしながら
おどっている、声をかけてくれたお姉さんが手びょうしをし
てくれました。そして、最後には大きなはく手をしてくれて、
笑顔でハイタッチもしてくれました。その時、とても温かい気
持ちになり、「国がちがっても同じように楽しめるんだ。」と思
いました。

この体験を通して、わたしは人けんについて考えました。人けんとは、一人ひとりが大切にされていることだと学校で学びました。クウエートパピリオンでの体験は、まさにそのことを教えてくれたように思います。国がちがっても、言葉がちがっても、おたがいを大切にする気持ちは同じです。自分とちがうからといって相手を笑ったり差別したりするのではなく、「ちがうからこそおもしろい。」と考えることが大切だと思いました。

これからわたしは学校や地域で外国人の人と出会った時、勇気を出して声をかけたいです。そして分からないことがあっても、相手に伝えようとする気持ちを大事にしたいです。クラスの友達の間にも、それぞれの良い所を大切にしながら、仲良くすくすくしていききたいです。わたしのクラスのみんなも、好きなものや考え方は人によってちがいます。そのちがいをおもしろいなど

思ったり、すごいなと思ったりできる人になりたいです。

万博での経験は、わたしにとって人けんについて考える大きなきっかけになりました。人けんはむずかしい言葉と違っていいけれど、世界の人も日本の人も、みんなが大切にされているということだと思います。国や文化がちがっても心から「友達になりたい。」「いっしょに楽しみたい。」「と思えば通じ合えると分かりました。これからもわたしは周りの人を大切にしながら、ちがいをこえて、人とつながれる人になりたいです。



男らしく、女らしくは関係ない

ぼくは、「ピンク色」がすきだ。理由は、ぼくのすきなユーザーのメンバーカラーがピンク色だからだ。けれども、ぼくは、友達にすきな色を聞かれたときには、「青色」がすきと答えている。ぼくのまわりの友達には、青色がすきな人が多い。だから、それに合わせて、ぼくは青色がすきと答えている。ぼくがどうしてまわりに合わせて青色がすきと答えているのか、理由はわからなくて、なんとなくそう答えていた。この前、道德のじゅぎょうで、『レッド赤くて青いクレヨン』の話し『の学習をした。レッドは、レッドという名前だけけれども、中身は青いクレヨンである。まわりのクレヨン達には、レッドという名前なのに、青い色をおかしいと思われていた。

でも、パープルだけは、名前で赤と決めつけずに、レッドの身を見て、海がかけたり、空がかけたりするレッドの良さに気づいてくれた。ぼくは、パープルのように、名前や見た目で決めつけずに、その人のこせいを大事にしていきたいと思った。その後、u&rという番組の『男らしく、女らしく』というお話を見た。このお話には、かわいいものが大すぎで、家でお人形作りをしている男の子の「アイ」と野球がすきな女の子の「ユウ」が出てくる。アイは「男らしくない」とまわりにばれたくないから手がいすきと知られたくなかった。ユウは野球がしたかったけど、「女だからだめ」と言われて、仲間に入れてもらえなかった。二人とも、世の中に男らしく女らしく

の考え方があることによって、すきなことをどうしようと楽しむことができなかった。でもユウとアイは、世界には自分らしく生をつらぬいている人がたくさんいることを知り、自分らしく生きていくことに気づいた。

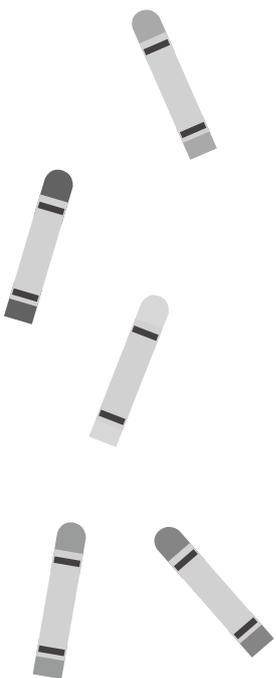
ぼくは、この番組を見て、「ピンク色が好きとすなおに言えず、自分がまわりの人に合わせて、「青色」が好きだと言っていた理由がわかった。それは、ピンク色は女の子っぽい色だと心のどこかで思っていて、それを正直に言つとバカにされる、からかわれると思ったから、かくしていたのだ。実さいに、道徳のじゅぎょうの最初に、先生がみんなにすきな色とあまりすきではない色を聞いていた。その時に、クラスの男の子が、

「。ピンク色は、女の子の色っぽいからすきではなご。」

と聞いていて、いやな気持ちがあった。けれども、道徳のじゅぎょうを通して、男だから女だからで決めつけずに、自分のすきな

ものを大切にしていることを学んだ。「ピンク色がすきなことをかくす必要はないことに気づいた。友達に無理に合わせてやうとせずに、自分のすきなものや意思をそんちょうしていいのだと思った。

これからは、名前や見た目、男だから女だからで決めつけずに、その人の中身の良さを理かいいし、みとめていきたい。そうすることで、ぼくの良さもまわりの人が理かいいし、みとめてもらえると思う。そして、そういう人がふえていくことで、だれもが自分らしく自信をもって生きていけるようになってほしいと思う。



笑顔をふやそう

ぼくが人権という言葉聞いて、最初に思ったのは、いじめです。

いじめは、昔も今もなくならずに、どこかで起こっています。もしかしたら、気がついていないだけで、ぼくのすぐ近くでもあっているかもしれません。

いじめと聞いて思うのは、たたいたり、けったり、物を投げたりする暴力、悪口やかげ口、物をかくしたり、こわしたり、仲間はずれにしたり無視したりすることです。仲の良い友だちとけんかをするごとはちがいます。友だちとはけんかをしても仲直りすればよいです。でも、いじめはだれかが、だれかをきずつけます。どうして、そんなことをするんだろうと思います。何か原因があるはずです。だけど、原因なんてわかりません。だから、考えてみました。

まず、いじめる人はどんな気持ちでしているのかということ。楽しいから、面白いから、だれかがきずつくことがうれしいから、どれもいじめられる人にとっては楽しくない、面白

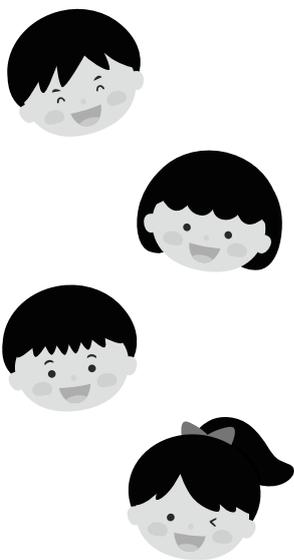
くない、つらいことです。

次に、どうしていじめるのか、ということ。自分が強いと思われたいから、自分がなんでも一番だと思っているから、自分のもやもやした気持ちをだれかのせいにして、すっきりしたいからだ、ぼくは考えました。どれも、自分勝手だと思いました。でも、もしかしたら、だれも自分のことをわかってくれないとか、わかってほしいとか、声をかけたのに気づかれなくて、そのことを無視されたと思って、仕返しをしたとか、どんだんやめられなくなってしまったのかも思いました。それなら、かんちがいから始まったのかも思えないし、相手のことをよく知らなかったり、自分のイライラを発散させたかったけなのかもしれない、と思いました。そう考えたら、いじめという感じではないけれど、ぼくも友だちに対して、ちゃんと関わっているのかな、と不安になりました。自分では気づいていないけど、ぼくの言葉づかいや態度で、友だちにいやな思いをさせていないか、という事です。ぼくは、友だちからいやな

ことをされたことがあります。上へつとくつをかきされて、見つけるのが大変だったことがあります。それは、だれかがわざとかくしたのか、どうしてそんな場所に置いたのか、最後までわかりませんでした。どんな気持ちでかくしたんだろう、こまっているぼくを見て、どんなふうにも思ってたんだらうと、ぼくはずっと考えています。でも、まだわかりません。いつもは忘れていても、思い出した時に、あの時の悲しかったこと、くやしかったことを昨日のことみたいに思い出して、悲しくなります。でも、ぼくには心配してくれた友だちがいます。いっしょに探してくれた友だちがいます。その友だちのことを思うと、心があたたくなくなって、やさしい気持ちになります。だから、ぼくも友だちにやさしくしてあげようと思います。こまっている友だちがいたら、声をかけて、手伝おうと思います。ぼくが友だちに助けてもらったみたい、ぼくもだれかを助けたいと思いました。

そして、ぼくは気がつきました。助けてもらった時、声をかけたり手伝ったりした時に、友だちから「ありがとう」と言われた時、どっちも笑顔になることです。笑顔は、みんなを明るくしてくれます。笑顔の人を見て、だれもいやな気持ちになりません。笑顔がたくさん集まったら、きつといじめはありません。笑顔になるために大事なことがあります。いじめにならない

ために大切なことがあります。それは、あいさつをすることです。あいさつは話ができるきっかけになります。そして、いっしょに遊んで、たくさん話をするからです。けんかをするのもあると思います。でも、自分だけでなく、相手の話もよく聞きます。悪いことをされたら、悪いとちゃんと伝えます。悪いことをしたら、必ずあやまります。そうすれば、仲直りできて、また仲良くなれます。笑顔にもどれます。いじめにはならないと思います。ちゃんと友だちといっしょに話をしたら、かんちがいしないで、友だちの気持ちが分かります。思いこみで、人をきめつけません。でも、これは全部あたたまえのことです。あたたまえのことができていないから、いやな思いをする人がいたり、いじめになったりします。自分と同じ気持ちの人、自分とは反対の気持ちの人、それぞれの人の気持ちをよく考えながら、あたたまえの毎日を過ごしていきたいです。そして、笑顔がたくさんの毎日になれるように、自分から話しかけていきたいです。



共に生きるためには

絵本に出てくるオオカミは、こわいものとして登場することが多いです。童謡やキャラクターとして出てくる熊は、かわいいものとして登場することが多いです。しかし、実際に人をおそうのは熊なのに、熊がこわいものとして出てくる絵本にほくは出会ったことはありません。

『二びきのかわいいオオカミ』という絵本は、オオカミの三兄弟がオオブタに何度もいたずらをされながら家を作るお話です。どんなにこわれないだろうと考えてじょうぶな家を作っても、オオブタがこわしてきます。これ以上じょうぶな家はないなどこまっていると、たくさんのお花を運ぶカバに会いお花の家を作ります。オオブタはまたこわそうと大きく息をすい込んだ時、お花のいい香りがしてこわすのを止めてオオカミと仲良くなり、最後は四人でくらすお話です。

ぼくは、この絵本を読んで、ぼくたちの学年に足りないものを見つけた気がしました。

一つ目は、決めつけです。見た目やこの人はこうだからと決

めつけてしまうことがあると思います。見た目やうわさだけで判断していたオオカミたちは、一しょにオオブタと遊んでみたらこわいブタじゃなかったことに気が付きます。ぼくたちも相手を知ろうとしていないのかもしれないと思いました。

二つ目は、やさしさです。言葉では、思いやりをもって接すると言っただけで、実際はまだできていないところがあると思います。オオブタも、オオカミたちにやさしくされて、今までのことをあやまりました。やさしさがあれば、相手もかわる事ができるのではと思います。

ぼくたちの学年では、一学期にくつのいたずらが続いて、毎朝教室まで全員くつを持って上がるようになりました。休み時間などくつが教室にあることをわすれて外に行こうと下まで行って、「あ、くつ…」と何度もなりました。だれがいたずらしたんだよ、なんで自分がされたらいやなことをするんだろうと不思議な気持ちといかりの気持ちがわき上がりました。このままでは安心して学校に行くことができません。

ぼくたちは、考え方も性かくも、バラバラです。ぼくにはふた子の弟がいます。ふた子でも性かくはバラバラです。

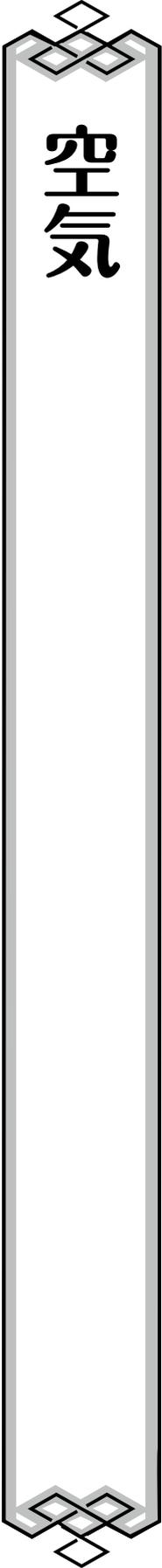
アンパンマンの生みの親である、やなせたかしさんは、「てきだけど味方、味方だけどてき。」と本で書いていたのを読みました。パンを作るときにもキンが必要、食品のてきと思われ、るバイキンが必要と考えてアンパンマンにバイキンマンを登場させたところ、話がとてもおもしろくなったそうです。それを「共生」というのだそうです。

共生するためにどうしたらいいのかぼくは考えました。一つ目は、自分が相手にいやな思いをさせてはいけないことです。いやな思いになると、自分も得をしないし相手も得をしないからいやな思いには、おたがいに相手を考えて行動する必要があらうと思います。それにいやな気持ちになると、おたがい相手ばかりせめて自分は悪くないように言っています。ぼくもよく弟ばかりせめて自分は悪くないように言っています。それから自分で「今日は言ひすぎました。」など反省したり、後かいたりします。いやな気持ちにはさせたらいけないと考えました。二つ目は、みとめ合うことです。相手の意見をみとめないで、おたがいにかんちがいをするところがあります。ぼくも弟に自分の意見だけをおし通して、弟のことを考えずにそのままけんかになったことがあります。だけど、相手の考えをみ

とめて、話し合えばスムーズに解決してけんかしないで済むことになったことがあります。そうするといやな気持ちにならなくていいので、おたがいにいい気持ちのまま楽しくすごすことが出来ました。人は、やさしくされるとうれしくなり、せめられると悲しい気持ちになります。

ぼくもふた子のあまえ上手な弟はついあまやかしてしまうけれど、もう一人の弟にはいいわるをしてみつことがあります。だから、出来るだけもう一人にもやさしくしようと思っています。

ぼくたちの学年には今「やさしさ」と「みとめ合う」ことが足りずに、勝手に決めつけることが多いと思います。それを改ぜんしていかないとだと思います。でもそれは、かん単なことではありません。ですが一人一人がちょっとずつやさしさを持って、決めつけをへらすことでいじめがなくなると思います。兄弟ですら考え方も性かくもバラバラなので、学年になるともっとバラバラだろうけど、自分の考えを伝え、相手の意見を見とめ合い、共に生きていける学年になればいいなと思います。そうすることで、みんな安心して「共生」してすごせると思います。



空気

自分が、一人の人と遊んでいたとしましょう。そして、その

相手からかわれたとします。その時は、いやだなと少し思っても笑って過ごすかもしれません。しかし、時が流れるにつれ、どんどん一人から、二人、三人と増えていくものです。気がつくこと、たえられないじめにつながってしまつこともあります。

僕は、その時間と共に流れる「空気」という目で見ることも触れることもできない存在がとても重要だと思っています。それは、生きていくために息を吸い体へ酸素を取り入れるだけではありません。よりよく人と人が共に生きていくために、心にも関わってへることを考えています。

例えば、電車にお年寄りの方が乗ってきたとします。そこで、隣の人が席をゆずったなら「自分もゆずった方がいいのかな。」と思うのも、そこに流れる空気から何か心に届いたのだと思

ます。

「空気を読む」という言葉を僕はよく聞きます。それは、良い事にも悪い事にもつながっていくと思います。先に書きたいじめの話では、悪い事につながってしまっています。そして、どんどんじめられて時が流れる程じめられた人は、一生心に残るぎずを背負うことになります。

他にも、悪い事につながる時は不登校になり、自分の思い描いていたような学校生活が送れなくなるかもしれません。もっと悪くなると、自殺というついにまでつながるかもしれません。それは、一つのことでもすごいきせきの命をなへすことです。命は、お金では買えません。何兆円を払っても買えません。一人に一つだけの特別な命です。そんな大事なきせきで僕たちは生きています。それを、ただの空気でできたいじめで失うことは

絶対にだめです。

このように、人と関わる中で流れる重要な空気は、集団の中の方がもっと心に深く届きます。集団の中で、空気が良い方につながる時には、一人の人が多くの周りの人から「この人は、とても優しい人だ」と親われることもあります。

もし、いじめられている人に気がついたとします。「友だちがやっているから。」「自分の友情をこわしたくないから。」と空気を読みいじめに加わってはいけません。僕は、「私もやろうかな。」と心から思う人はいないと思います。だから集団で空気を良い方につなげられると思います。小さなからかいでも困っている人に手をさしのべたり、いじめをやめさせたりできると思います。すると、周りの人たちは「あの人かっこいいね。」「いい人だね。」と、さらに少しずつ良い空気がつながっていきます。

良い空気がつなげると、友だちも増えます。親友や深いきずなができるかもしれません。そして、集団の空気が一人のすこいきせきの命を救います。救えた集団の中にいる一人ひとりには、

すごい人です。そしてまた、助けた恩返しがあると 생각합니다。そういう空気の良いつながりを広げていきたいです。

残念ながら、今の日本ではいじめで自殺している人がいます。そんな悪い空気のつながりはやめていきましょう。僕は、保育園の頃一人の男の子が困っていることに気づいて助けました。そして、その友だちに僕も助けてもらいました。

僕はこれからも、良い空気をつなげていきたいです。あなたも、いっしょに助けてみませんか。身近で困っている人、泣いている人、もしかしたらいじめられている人、みなでいっしょに助けましょう。最初は、身のまわりの家族や親せき、いつも遊んでいる友だちで困っていいような人はいないか探してみてください。少しでも、一人でも人を助けられたら、それはもうすごいことです。声をかけ合っただけでも、その周りは良い空気につながります。さあ、今からいっしょに自分の身の周りの空気を良いつながりに広げていきましょう。

言葉の使い方

言葉には、人を温かい気持ちや幸せな気持ちにしてくれる力があると思います。「おはようございます」などのあいさつの

言葉や「ありがとう」などの感謝の言葉、「大丈夫?」「無理しなくてもいいよ」「そのままでもいいんだよ」などの心配や相手に寄りそえる言葉などがそうだと思います。しかし、相手をやな気持ちにさせたり、きずつけたりする言葉もたくさんあります。

学校やテレビなどでいじめについて考える機会がありますが、大体のいじめは悪口や冷やかしなど言葉によるいやがらせから始まっていることがほとんどだといつことでした。いじめを受けた側は、心に深いきずを残しますが、いじめを行う側は、遊び半分だったり、ふざけていたり、悪いことと感じていないことが多く、そんなに相手のことを考えず、ただ「自分たちが

楽しければいい」と人をきずつける言葉を平気で言う人たちにいかりを感じずにはられません。

わたしもクラスの友だちから挑発されるようなことを言われたり、ばかにされたような言葉を言われ、いやな気持ちになったことがあります。明らかに悪意が感じられる場合は、「そんなこと言わないで、いやな気持ちになる」とおこつたり、言い返したりできるのですが、何気なく言われた言葉には、悪気はないと分かっている、ずっとモヤモヤとした気持ちだったり、笑って返事をしていても心の中でズキズキしていることが多く、「わたしが何かいやなことをしたのかな」「わたしが悪いのかな」と不安になってしまつこともあります。この「何気ない言葉」は、注意が必要で、責任を持たないといけない言葉だと思えます。言った本人は悪気がなくても、相手の受け止め方

にわたっては、とてもきずつく言葉になってしまつてことをわすれてはいけないといつことです。わたし自身はどつなのか、友だちにいかな言葉を使っていないかと心配になり、ふだん友だちに言っている言葉をふり返つてみました。友だちをきずつけるような言葉は使っていませんでしたが、学校生活の中でわたしが「ちゃんとした」という思いが強く、友だちのペースや気持ちを考えずに「ノートを書いてー」「ちゃんとしてー」など少しきつく言葉を言ってしまうことがあるといつことに気が付きました。ちゃんとするのがよいことというわたしの考え方で、相手の気持ちやペースを考えずに言ってしまうので、言葉で伝えることは本当にむずかしいなと思いました。「こんな言い方をしたらいやな気持ちになるかな」、「わたしだったらこう言われたいな」と自分のなかで一度考えながら、考えや意見を伝えることが大切だと思いました。

学校の委員会活動でわたしが入っている人権平和委員会では、全校でほかほか言葉を書くハッピーカードといった取り組みをしています。この取り組みは、学校がほかほか言葉であふ

れるようにしたいという思いで始めました。放送でたくさんハッピーカードを書いてくれている学年を発表したり、ハッピーカードに書いてあることを発表したりしています。わたしはこの取り組みで、ふだんから少しでも友だちの温かい言葉や行動を探そうとしてくれる人が増えて、自分も温かい言葉を使ってみようとしたり、行動につつしてみようとしたりする人が増えていけばいいなと思います。

言葉は、使い方や言い方によっては相手をきずつけてしまうものです。「何気なく言った言葉」にも相手はきずつくことがあるといつことをわすれず、相手の気持ちを考えること、相手の気持ちになって思いやりの心を持つことが大切だと思えます。そして一人ひとり、みんなが相手を思いやる気持ちを持つていけば、世の中は温かい言葉であふれていくのではないかと思います。

今回わたしは言葉の使い方について改めて考えることができました。わたしもクラスの友だちや家族、関わっていくすべての人に、温かい言葉を選んで使っていきたいと思います。

この夏、一人の女性から学んだこと

私は、この夏休みに初めての経験をした。

ある日、私は家のかぎを忘れ、お母さんの職場の病院にかぎをもらいに行った。その途中で、白じょうをもったおばあさんがゆっくりと歩いているのを見た。私は、目が見えていないようだけど大じょう夫かな、と少し気になりながら通りすぎた。

その後、かぎをもらい終わった私がお家へ帰っていると、まださっきのおばあさんが歩いてた。今さっきの人だと思ったが気にせず帰っていたら、白じょうのカタンコトンという音が聞こえなくなり、気になってふり返ってみると、おばあさんが止まっていた。目印が分からなくなり困っていたのだ。少し心配だったのでしばらく見ていたら、じっと立って動こうとしなかった。これは、声をかけて助けてあげないと思ひ、勇気を出して声をかけてみた。

「だいじょうぶですか。」

と声をかけて横に行くこと安心したよつで、

「あの。健生病院に行きたいんですけど。」

とすべし言葉を返してくれた。

「こちですよ。」

とかたをおしながら行くことすると、びっくりすることを言われた。

「うでをつかんでいいですか。」

私は全てが初めてのことで、え…なんでもなの…と思いつつも、言われた通りに歩いた。その時以前インターネットで、目が見えない人が目が見える人と歩くときには、うでをつかんで歩くという動画を見たことを思い出した。必死に私のうでをつかむおばあさんを見て、とても困っていたんだなあと思った。

目が見えない人は、歩はばが小さいため、その分歩くのもおそかった。だから、おばあさんが何回も、

「まだ着かないんですか。」

と聞いてきたので、私は

「もつ少しで着きますよ。」

とやさしく声をかけながら、病院までゆっくり向かった。

段差などの声かけもしながら、病院までつき、

「健生病院につきましたよ。」

と言った。

「本当にありがとう。ありがとうございました。」

と何度もお礼を言ってくれた。その後は、病院の職員さんがついて行ってってくれて、私は安心して病院を出て帰った。

私は帰っている途中にもう一度考えてみた。おばあさんが歩いていた道には、点字ブロックがなく、歩道の道もせまかった。車もとても近くを走るので、危ない道だった。私の前にだれもおばあさんに声をかけてあげなかったことを、とても不思議に思った。そしてあの時、私がおばあさんに声をかけていなかったら、おばあさんは病院に行けていなかったかと思うと、とても良いことをしたなとも思った。

私はこの経験を生かして、もし今回みたいに困っている人に出会ったら、このような声かけや行動をしたいということを四つ考えた。

まず一つ目は、「人にちは」など、やさしい声かけをするということだ。どんな人も、知らない人に声をかけられたら初めはびっくりすると思うからだ。

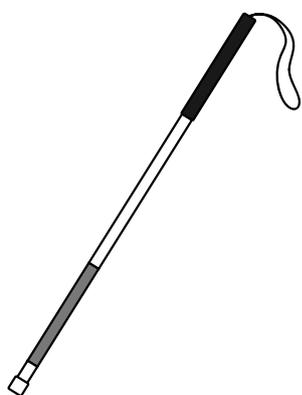
二つ目は、相手が何をしたいのかを聞くということだ。自分ばかり話しているとき、相手はあまり話をしてくれないと思う。

だから私は、相手が話しやすいように質問をしてあげると良いと思った。

三つ目は、私がおばあさんに声をかけたときにできなかった会話をすることだ。ちょっとした会話でも、相手のことを知るからだ。そして、もっと安心して話してもらえて、良いと思った。

四つ目は、相手のペースに合わせることだ。自分も相手もおたがいのことを全く知らない。だから、自分のことだけでなく、相手のことも思って考え行動することが大切だと思った。

私は、この考えた四つのことと、今回の夏休みの経験を生かしてこれからも過していきたく思った。そして、いつかは障がいなど関係なく、みんなが安心して暮らせる世界になるといいなと思った。



今、自分ができている「こと」を

「いつも元気な声を聞かせてくれて、どうもありがとう。それじゃあ、また来週の日曜日だね。」

「うん、また来週の日曜日だね。」

これが、ばあばとぼへへの毎週日曜日のお決まりのやり取りです。

ぼくには、宮城に一人で生活しているおばあちゃんがあります。ぼくは、ばあばと毎週日曜日電話をしています。六年前におじいちゃんが亡くなり、一人暮らしになったばあばが元気にしているか、さみしくないか心配で、たまに日曜日に電話をしていたのがきっかけです。そして、二年半前にはあばが脳の病気をしてから、毎週電話をするようになり、今では毎週日曜日の定番になっています。おたがいがその週にあった出来事などを話すのですが、ばあばは、とても喜んでくれます。ぼへの元気な声を聞くと元気が出ると言ってくれ、ぼくにとても楽しい時間です。

夏休みは、いつも電話でしか話すことができないばあばと会える数少ない機会です。今年の夏休みも宮城へ帰省することが

でき、一年ぶりに会うことができました。ぼく達の帰省をとても喜んでくれ、

「大きくなったね。また、背が伸びたね。」

と、笑顔で温かくむかえてくれました。ばあばも元気そうで、ぼくも安心しました。だけど、すぐに去年よりも体の自由が利かなくなっていること、それから、耳がもっと遠くなっていることに気付きました。電話では、全く気付かなかった変化に、ぼくはショックを受けました。

また、ばあばと話してみると、電話ではスムーズに会話できているのに、直接たとなかなかスムーズに会話をするのができません。ぼくは、去年の帰省の時にお姉ちゃんが、

「まず、ばあばに自分に気付いてもらう。」

と、教えてくれたことを思い出しました。しかし、去年より耳が遠くなっているばあばは、呼びかけただけでは気付かないことが多いようでした。そこでぼくは、肩をトントンとたたいたり、視界に入るよう移動したりし、ぼくに気付いてもらうよう

にしました。そして、気付いてもらってから、ゆっくり大きな声で話したら、電話で話す時のようにスムーズに会話することができました。

また、ぼくは、体が思うように動かなくて、家の中でも外でも手押し車を使ってゆっくりゆっくり動いているばあばを見ていると、じつかにつまずいて転んでけがをするのではないかと、とてもハラハラしました。そこで、ばあばがあまり動かなくていいように、ぼくが代わりに動くように思いました。ばあばも喜んでくれたので、ぼくもうれしくなって、積極的に色々と手伝っていました。ところが、近くに住んでいて、普段ばあばのお世話をしてくれているおばちゃんは、何か手伝ったりする様子もなく、ただばあばの様子を見ていることに気付きました。その様子には、ぼくがとまどっていることに気付いたおばちゃんは、「大丈夫、運動だから。たまに動かないと、ますます動けなくなってしまうからね。」

と、優しく教えてくれました。ぼくは、ハッとしました。ばあばのためと思って、ぼくは色々してしまっていたけれど、実はばあばの体を動かす機会を減らしてしまっていたことに気付きました。

ぼくは、数日間ばあばの家で過ごしてみても、家の中にはばあばが生活しやすいように様々な工夫がされていることに気付きました。

ました。手押し車で動きやすいように、床や廊下には必要最低限の物しか置かれていない。段差がある所には、無理なくのぼりおりができるよう踏み台が置かれ、段差が小さくしてある。いたるところに手すりが付けれられている。どれもこれも、ぼくには必要のないものばかりだけれど、ばあばにとっては、大事なことばかりです。

ぼくは、この帰省で、ばあばが心配だからと代わりに動くのではなく、普段一人で生活しているばあばが、一人でも生活しやすいように工夫し、見守ってあげることが大切なんだということ学びました。そして、この出来事は、今、ぼくがばあばにできることは何か、と改めて考えるきっかけにもなりました。遠くはなれて生活しているぼくにできること、それは毎週日曜日にしている電話だと思いました。

これからも、ばあばにとって楽しい時間になるよう、大切に続けていきたいと思います。

また、ぼくは、もし一人一人が身近な誰かのために、今、自分ができることをしたら、どんどん笑顔が増えて、おたがいが幸せな気持ちになり、みんなが生活しやすくなるのではないかと思います。そんな優しい世の中になるといいな、と思います。

ぼくの将来

「なんでそんなしゃべり方なの。」

「何かしゃべってみて。」

一年生の時、クラスメイトからそう言われ泣きながら帰ったことがある。

ぼくには、きつ音がある。ぼくはぶつこにしゃべっているけれど、たまに言葉がつまってしまう。そのことで、入学前はとても不安だった。幼稚園の頃から話し方の教室に行っていて、自分では少しよくなったかなと思っていた。しかし、一年生の時クラスメイトからしゃべり方のことを言われて、ぼくはからかわれたように感じた。言った人はきつといやがらせで言ったわけではないと思う。でも、ぼくはとてもきずついた。もう、こんな思いをしたくない。ぼくは家族と話し合った。

家族からは

「きつ音は治らないからこれからはまわりの人にわかってもらうことが大切だよ。」

と言われた。だから二年生の時にきつ音のことをみんなの前で話すことにした。話す前はとてもどきどきしたのを覚えている。「みんながわかってくれるかな」「せうい言われたらどうしよう」不安でいっぱいだったが勇気を出して言ってみた。

「ぼくにはきつ音があります。言いたいことがあるんだけど言葉がつまって出なくなってしまうんです。」

その話をしてから、きつ音のことについて言われなくなった。そして今までより楽しく会話ができるようになった。とても居心地がよかった。四年生の時も同じようにみんなに話した。するとクラスメイトから質問がきた。

「どうしてぼくですか。」

その質問に対して、

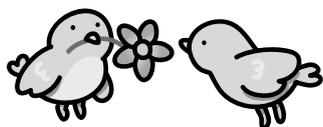
「話を聞いてほしいです。同じ言葉をへり返したりなかなか声が出なかったりするけど最後まであせらず聞いてくれるとうれしいです。」

と答えた。ぼくは、きつ音がありながらも話すことが大好きだ。だから、みんなと話したかった。みんなに言う前はわかってもらえるか心配できん張したけど、言った後は気が楽になった。そして質問に答えた後のみんなの反応を見て、「しっかりと伝わったんだな」と思い、とてもうれしかった。

ぼくは今、六年生になった。たくさん話していくうちに、言葉がつまる回数も減ってきた気がする。だけど、時々発表や会話の中で言葉がつまる。みんなは、ぼくが言えるようになるまで何も言わずに待っててくれている。そんな時に、ぼくはみんなに「ありがとう」という気持ちになる。入学前は不安だったのに、今はこうしてたくさんの友達と楽しい学校生活を送れているのは、周りの人の理解のおかげだと思う。そして、二年生や四年生の時に勇気をふりしぼってきつ音のことを伝えた過去の

ぼくのおかげでもある。「周りの人」と「自分」に支えられて今のぼくがある。

他にもぼくと同じきつ音の人はいる。もしもその人がきつ音のことを言えずになやんでいるのなら「ぼくはみんなに伝えてよかったよ」と言いたい。伝えることで、もしかしたら楽しいことが増えるかもしれない。もしかしたらもっと友達が増えるかもしれない。もしかしたらその友達の友達とも仲良くなれるように、わかってくれる人が一人でも多くいたらいいなと思う。そしてぼくは将来、ぼくの友達がしてくれたような人になりたいと思っている。その人の力になれて、助けになれるような人に。友達がしてくれたことを今度はぼくがしてあげる側になりたい。そしてそれが、ずっと続いていくと思うから。



メガネをかけることは当たり前のこと

僕は自閉スペクトラム症です。僕は小学生の時に支援学級に入っていました。苦手なことがたくさんあって、クラスよりも

支援学級の方が落ち着いて授業が受けれたからです。支援学級には魚博士と呼ばれている友達がいきました。博士は絵や漢字を覚えることがとても得意な人でした。僕は反対に漢字を覚えることがすごく苦手なので、いつもすごいなと思っていました。でも、博士にも苦手なことがありました。それは人の前で発表することや体育で体を動かすことです。だからいつもその時間になると支援学級に来て、心を落ち着かせていました。

僕たちの支援学級には「イヤイヤメーター」というシステムがありました。それは、「イヤイヤメーター」が三から五になったら支援学級に来て、心を落ち着かせて一になったら教室に戻るというものでした。博士は、それをよく使っていました。

他にも「ほっぴシール」があったり、目標達成したら好きなこ

とが出来た時間をもらえたり、イライラが溜った時は人形を触ったり、折り紙をする時があったりしました。

それは僕たちにとって心のバランスを取るためにも大切なシステムで、それがあったから苦手なことも乗りこえることが出来ました。

でも、クラスの友達はそのようなシステムがなくても普通にすごしているから僕たちはずるいことをしているんじゃないかと思うこともありました。なぜ、皆と同じ様に出来ないんだろうと少しだけ思ったこともあります。頑張っても頑張っても漢字や単語を覚えられないし、人と話をする時はすごく緊張してうまく話せないし、教室の騒がしい音も苦手で、なぜそうやってまづのかもわからず、自分の体をつねってイライラする気持ちを落ち着かせることもあります。そんな時は頑張らなきゃいけないと思っていてもコントロールが自分でも出来ません。その

事をお母さんに伝えるとお母さんは

「支援を受けることは、目が悪い人がメガネを使うのと同じくらい当たり前のことで、けっしてずるいことではないし、それは必要なことだから、自分を責めたらだめだよ。」

と言ってくれました。そして

「でも、世間はまだまだ障がいに対する理解が足りないし、あなたがそんなにも苦しく感じていることはわかりにくいから難しい問題だよ。この子なら頑張れるだろうって思う人もいると思うし、もちろん頑張れることは頑張らないといけないし…」と続けて困ったように言いました。

僕はその言葉を聞いてハッとしました。なぜなら博士に僕は「もう少し頑張ろう。」とよく言っていたからです。だって、博士は支援学級では発表できていたし、運動も参加していたから「博士なら絶対できる。」と思っていたからです。あと、僕と博士は違う中学校に行くことが決まっていたし、二人とも中学では支援学級に入れないことも決まっていたので、少しでもクラスで出来るようにならないと中学に入ってから博士が苦勞するんじゃないかと心配したからです。でも、その「頑張れ」の言葉が博士には辛い言葉だったのではないかとお母さんの言葉を

聞いて思ったのです。

僕たちの障がいはとてもわかりにくくて理解してもらえないものです。障がいを持っている僕でも博士の障がいについて理解しているつもりで理解できていないところもあるし、自分自身のことでもよくわからないことがたくさんあるのだから、障がいがない人がこの気持ちをちゃんと理解するのはもっと難しいことだと思います。でも、少しでも多くの人にこの辛さや大変さを理解して欲しいです。

僕たちは障がい者になりたくてなったわけではないし、けっして障がいがあることが悪いことだとは思っていません。ただ、お母さんが言ったように、「メガネをかけさせて欲しい」とお願いしているだけです。僕たちがなぜ中学では支援学級に入らなかったのかはわからないけれど、支援学級でないと頑張れない子、支援学級に入ったら頑張ることができる子に対しては手を差し伸べて欲しいと思います。僕の学校の先生達は僕に合った支援をしてくれようと頑張ってくれています。支援をしてもらえることが当たり前と思わず、先生や家族に感謝して中学校生活を僕も頑張ります。

違いの向こうにある笑顔〜ウクライナの友だちとの出会い〜

私は最近、新しい出会いを経験しました。それは、ウクライナから避難してきた小学三年生の少女・Aさんとの出会いです。私の家族がウクライナ支援をしている関係で、彼女は家族で私の家によく遊びに来るようになりました。金色の髪と青い目、そして少しだけ恥ずかしそうな表情が印象的でした。

「戦争から逃げてきた子なんだって。」

私は最初そう考えて、「外国から来た子だし、日本語も話せなさそうだし、話しかけるのは難しいかな」と思っていました。Aさんのことを気にしながらも、どう接していいのかわからず、最初のうちは遠くから見ていただけでした。

ある日、親が

「Aさんが困っていたら助けてあげて。」

と言いました。そのとき私は、「自分にも何かできるかもしれない。」と思い、Aさんとの食事のときに、

「これ、スプーンだよ。」

「おいしいよ。」

など、かんたんな言葉で話しかけてみました。

Aさんは、少しびっくりしたような顔をした後、にっこり笑って

「ありがとう。」

と言ってくれました。その笑顔を見て、私は「言葉がちがっても、ちゃんと気持ちは伝わるんだ。」と感じました。

その日から、私は少しずつAさんに話しかける

ようになりました。彼女も少しずつ日本語を覚えてくれる、

「おはよう。」

「楽しい。」

と言ってくれるようになりました。

そんなある日、Aさんはウクライナのことを紹介してくれました。伝統的な衣装を着て、自分の国のことを一生懸命に話してくれました。ウクライナの料理やお祭り、家族のこと、そして戦争で家を離れなければならなかったつらい話もしてくれました。

私はそのとき、Aさんが笑顔の裏で、どれほど大変な思いをしてきたかに気づきました。そして、「私たちがぶつづつに暮らしている毎日は、あたりまえじゃないんだ。」と感じ、胸がぎゅっとなりました。

同時に、私は彼女の文化や思いを聞いたことがうれしくて、「ちがたって、知らないからこわいだけなんだ。」と気づきました。知ろうとすれば

するほど、その人のことが分かるし、もっと仲良くなれる。Aさんの話を聞いて、私の中の「ちがい」に対する考え方が変わりました。

今、私はAさんと大の仲良しです。日本語とウクライナ語を教え合ったりもしています。彼女が「日本に来てよかった。友だちができてうれしい。」と言ってくれたとき、私もとてもうれしくなりました。

この経験を通じて、私は「人権」というものがとても身近にあることに気づきました。国や言葉、見た目や文化がちがっても、みんな同じように笑ったり泣いたりする心をもっています。だからこそ、誰かを「ちがう」というだけでさびしい思いをさせてはいけなと思います。

これからも私は、Aさんとの出会いを忘れず、「ちがいをこわがらない心」「知ろうとする気持ち」を大切にしていきたいです。そして、世界中の人と仲良くできるような大人になりたいと思います。

言葉は心にきざまれるタトゥー

私がこのテーマを選んだ理由は、特に体型について言われることが多く、好きな服装ができなくなったり、自分に自信がなくなっていくということを経験してから、言葉の重大さをもっと知ってほしいと思ったからです。もっと詳しく話すと、知らない人に

「え、足太。」

「お前聞こえるよ。」

と帰り道に言われたり、友達に

「いや、〇〇はデブやけんスカートはくの無理やろ。」

と言われました。私はこの言葉を受けて、どんどん自分に自信がなくなっていき、体操服を着るの

も、中学生になって制服でスカートを着ることも、足が出ている服、露出が多い服を着ることも怖かったです。周りの目ばかり気にして生きるようになってしまいました。何をしても、その言葉を思い出していました。言葉は心にきざまれて、言われた側は一生忘れません。タトゥーと同じように、言葉は一生物なのです。タトゥーはレーザーで消しても彫る前と全く同じにはならず、多少跡が残ります。言葉も一緒で、どれだけほめられても、悪口だけが完全に消えることはなく、心に傷の跡が残ります。ですが、ほめられたり、心が安らぐ事があれば、跡は残っても、心が安らぐ前と比べればきっと、心は少し良い状態に近づいていくと

私は思います。

今の私の周りには、私以上に怒ってはげましてくる家族や友達がいます。その周りの人に助けられて今の私があります。でも、「もし私が周りに相談できずに一人でかかえこむ人だったら」と考えると、今の私は常に自信がなく、引きこもっていたと思います。世の中にはこのような経験をして苦しんでいる人がいるかもしれない。そう思うと、とても心が痛みます。どうか周りの事を気にせずに自分が好きなことをしてほしいです。直接は言えないけれど、私はそう思っています。

私は今後、傷ついて自信を無くし、好きな事ができなくなったという人を少しでも減らすために行動にうつしていきたいです。それは、周りに悩みをもつ人がいたら伝えたい事を全て言う、私自身も自信を持ち好きな事をする、という事です。

この二つの行動をすることによって少しでも、心にきざまれているタトゥーが薄くなればいいなと思っっています。

このように、言葉は人を最も攻撃するものであり、人を最もいやすものなのです。たとえば、その言葉に悪気がなかったとしても、相手からしたら「一生物のタトゥー。」

言葉の重大さを知り、過ごしてほしいと思っっています。その言葉を発する前にもう一度、考え直してみてください。その言葉は相手にとって良いタトゥーになりますか。

私は、痛くて傷が残るタトゥーではなく、相手の心に残る良いタトゥーが増えてほしいと思っています。みなさんも、「痛くない良いタトゥー」を増やしてみませんか。

僕に出来ること

僕はこれまで、学校で「いじめ」を目にしたことがありません。もちろん、友達同士の軽いからかいや、ちょっとした言い合いはありますが、本格的な「いじめ」と呼べるような出来事には出会ったことがないと思います。正直に言つと、人権作文のテーマが「いじめ」と決まったとき、「書けることなんてあるのかな」と思いました。だって、実際に目の前で誰かがいじめられていくわけではないし、それを止めた経験もありません。でも、少し考えてみると、いじめが起きない環境って、実はすごく貴重であり、大切にしなければならぬものだと思ってきました。何もないことが「普通」ではなく、誰かの気付きや思いやりが重なって保たれているのかもしれない。そして、「もし自分のクラスでいじめが起きたら、自分には何ができるんだろう」と考えるようになりました。

ある日、テレビでいじめについてのニュースがありました。ある中学生が、長い間クラスで無視されたり、陰で悪口を言われたりして、ついにはこの世を去ってしまったという話でした。その子は友達にも先生にも言えず、家族にもなかなか話せ

なかつたそうです。画面の中で流れていた言葉の中に、「誰か一人でも気付いてくれたら。声かけてくれていたら救われたのかもしれない」というものがありました。その言葉が、僕の心にずっと残っています。

僕はそのときに思いました。

「もし自分のクラスでそんなことが起きたら、僕は気付けるだろうか。」

「そして、そのときに勇気を出し切って行動することができるだろうか。」

いじめは、いきなり目に見える大きな形で現れるわけではないのかもしれませんが。最初は小さなからかいだったり、笑い話のつもりの一言だったものが、積み重なって、やがて人を深く傷つけてしまうことがあります。本人は「冗談のつもりだった」と思っていて、言われたほうはずっと心に残ってしまう。そんなことは、誰にでも起こりうることです。

僕自身、小六のときと中一のときに、下の名前をあだ名で呼び続けられたことがあります。大したことではないと自分に言

い聞かせていましたが、内心では嫌な気持ちが少しずつ溜っていききました。けれど、そのときに姉が

「すぐおさまるよ。大丈夫！」

とフォローしてくれて、すぐ救われたのを覚えています。たった一言だったけれど、その言葉のおかげで、気持ちが楽になったのです。もし誰も気付いてくれなかったら、僕は一人で抱え込んで、今とは違う思い出になっていたのかもしれない。

そんな経験があるからこそ、僕は「言葉の力」を信じています。誰かを傷つける言葉もありますが、誰かを救う言葉もあります。

たった一言が、暗い気持ちを少し明るくしてくれたり、孤独をやわらげたりすることがある。だから、僕もいざというときに、救える言葉をかけられるような人間でいたいと思っています。僕のクラスは、いじめもなく、みんな仲が良いと思います。でも、それが一生続くとは限りません。進学すればクラスが変わるし、部活やSNSなど、いろいろな場面で人間関係のトラブルが起きる可能性があります。だからこそ僕は、「何かおかしいな」と思ったときに、すぐに行動することができるような人になりたいと思います。

「いじめられる側にも理由がある」

この言葉を耳にすることがありますが、僕は違うと思っています。傷つけられていい人なんて一人もいません。たとえ相手に

苦手なところがあっても、暴言や仲間外れで解決していい理由にはなりません。もし自分がその立場になったらどんなに苦しいのか、少しでも想像すれば分かるはずだと僕は思います。また、もしそういう場面に遭ってしまった場合、僕はこう言える人間でいたいです。

「それって言いすぎじゃない？」

「ちょっとやめたほうがいいよ。」

そんな小さな一言が、誰かの心を守ることもあります。直接止められなくても、後から、

「大丈夫？」

と声をかけることだって、大切な行動だと思います。いじめがないことは、当たり前ではありません。今、自分の周りにいじめが起きていないことを当たり前と思わずに、「守りたい環境」として意識することが大切だと思います。そして、自分にできることはないか、日頃から考えることが、いじめを防ぐ力になると思います。

僕は、自分の言葉と行動に責任を持ちたいです。誰かが困っているときに、気付ける人になりたいです。そうやって、一人ひとりが少しずつ意識を変えることで、学校がもっと安心できるような場所になっていくと思います。

バリアフリーの大切さ

僕が駅に行ったとき、駅のはしの方にあるスロープを、車いすに乗った方がゆっくりと上っているのを見ました。

僕はその光景を見て、普段は気にもしていなかったスロープの存在を意識しました。僕にとっては、階段を使えばすぐにホームに行けるけど、車いすの方にとっては、階段は大きな壁になります。スロープがなかったら、この駅はその人にとって「使えない場所」になっていたかもしれません。僕は初めて、バリアフリーがあることで、誰かが困らずに生きられることを実感しました。

バリアフリーとは、障がいのある人や高齢者、けがをしている人、小さな子どもなど、誰もが安

心して生活できるように、社会の中の障がい（バリア）を取りのぞく工夫のことです。スロープ、エレベーター、点字ブロック、多機能トイレ、音声案内などがその例です。

僕たちが普段、何の苦労もなく通っている道や駅も、人によってはとても不便だったり、危険だったりすることがあります。その違いに気づくことが、バリアフリーについて考える第一歩なのだと、あのとき駅で見た出来事から学びました。

また、バリアフリーは施設や設備だけでなく、「心のバリアフリー」も大切だと思います。たとえば、スロープがあっても、誰も声をかけなければ、使いにくいと感じる人もいるかもしれません。

思いやりや気づかいは、どんな場所でも必要であると考えます。

僕はそれまで、バリアフリーは特別な人のためのものだと思っていました。でも今では、いつか自分も必要になるかもしれないと思うようになりました。けがをしたときや体調が悪いとき、年をとって体が動きにくくなったとき、誰にでも必要になる可能性はあるのです。

これからの社会は、多様な人たちが共に生きていく社会です。見た目にはわからなくても、困っている人や支えが必要な人は、僕たちのまわりにたくさんいます。たとえば、心に不安を抱えていたり、日常生活の中で小さな困難を感じていたりする人もいるかもしれません。そうした一人ひとりの生きにくさに気づいて、思いやりを持って接することが、真の意味でのバリアフリーだと思います。そしてそのためには、まず僕たち自身が、

自分にとっての当たり前が他の人にとっても当たり前とは限らないということを理解することが大切だと思います。

僕は、あの駅での光景をこれからもずっと忘れないでおきたいと思います。何気ない日常の中に、バリアフリーのありがたさと、人のやさしさが詰まっていたからです。今の僕にできることは、身のまわりのバリアフリーに目を向け、少しでも困っている人がいたら、自分から声をかける勇気を持つことです。声をかけること、手を差し伸べること、相手の立場になって考えること。そうした小さな思いやりの積み重ねが、だれも困ることのない社会・生活をつくっていくと思います。そしてそれが、いつかきっと自分自身のためにもなると信じています。僕はこれからも、日々の暮らしの中でできることを大切にしながら、バリアフリーな心を持って生きていきたいです。

思いやる気持ちと助け合う心

差別のない社会について、二つの身近な体験から考えてみようと思います。

「おじちゃん、こんにちは。」

「ああ。」

と右手を挙げて返事をしてくれるのは、ぼくの祖母の弟、つまり大叔父です。祖母の話によると、大叔父が赤ちゃんの時、高熱が原因で脳に障がいが残ったそうです。そのため、言葉が出ません。祖母は、小学校時代に弟のことだからかわれ、とても悲しい思いやくやしい思いをしたそうです。

大叔父は、長年、会社の社長が理解ある人だったので、瓦屋で働いていました。会社は障がいのある人も積極的にやとっていたそうです。そしてなによりも大叔父が働き者で、会社にとつてとてもありがたかったそうです。周りの人からもかわいながら、家族は社会に受け入れてもらったことに喜んだといいます。

ぼくはこの話を聞いて、障がいをもつ人やその家族に差別はいけないと思いました。そして、大叔父が働いていたような会

社が増えるといいなと思いました。

昨年の秋、ぼくは大叔父と一緒にさつまいもの収穫をしました。くわを上手に使って掘り起こしてくれ、ぼくがつるからごんどんちぎっていききました。言葉は出ないけど、少しの発音や身ぶり手ぶりで大叔父の言いたいことはわかります。とても楽しい時間で大叔父にお礼を言つと、にっこりと笑ってくれました。

ぼくは、差別のない社会について調べていると、ある法律を見つけました。それは「障害者差別解消法」です。これは、障がいのある人もない人も、互いに、その人らしさを認め合いながら、共に生きる社会（共生社会）を実現するために定められています。

そして、県政だよりを手にとってみると、「共生社会おおいた」の実現に向けてという特集があったので読んでみました。そこにも、社会情勢の変化に心じた多様な価値観や生き方を理解し、相互に認め合うことが大切であると書かれていました。

もう一つの体験は、その共生社会につながると思った体験です。母が習っているテニススクールで見たことです。ぼくもテニスをしているので、大人の練習を見て学ぼうとコートに目をやりました。そこにいたのは、年齢もバラバラ、あとで聞きました、外国の方もいました。母も和気あいあいと楽しそうにレッスンを受けていました。そうした中で、高齢の男性が、列に並べずに困っているような顔をしていました。その時、母がその男性のラケットの先を持ち、笑顔で、「ごっちですよ。」

と、列に誘導していました。その後も、周りの人達が同じような事をしていました。

レッスン後、母に話を聞くと、その男性は数カ月前では、みんなとラリーをしたり、会話をしたりできていたのが、だんだんと難しくなってきたそうです。それでも、周りの人達も変わらず、やさしく接しているそうです。決して嫌な言葉を投げかけたり、無視したりといった行動はありません。

ぼくは、テニスという共通の趣味で、いろんな人が差別なく楽しんでいることがいいなあと思いました。

私たちの身の周りには、偏見や差別、誹ぼう中傷などのさまざまな人権問題が生じています。

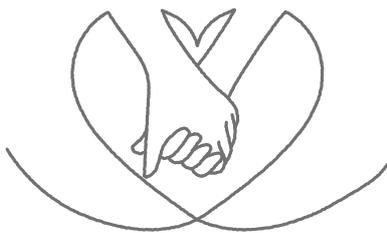
どのようなしたら差別のない社会になるのだろうか。

二つの体験から、相手を思いやる気持ちと助け合う心が大切だと思いました。

人権とは、人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利といわれています。障がいのある人も高齢者も人権があります。みんな幸せに生きる権利があるのです。差別されることのない社会でなければなりません。

ぼくは困っている人がいたら、勇気を出して声をかけたいです。以前、旅先で電車に乗っていた時、高齢の方が乗車していたので、

「どうぞ。」と、さっと席を立ちました。見て見ぬふりをしている人もたくさんいます。こんな小さな優しさが広まれば、相手を思いやり、差別もなくなっていくと思います。



母の耳、私の気づき

「ちゃんと聞いてー何回言ったかわかるん？」

そう私は母に何度も声をあげたことがある。母は以前から耳の聞こえがあまりよくなかったが、最近では日常会話の中で聞き返すことが多くなった。その度に私は

「早く耳鼻科に行って診てもらったら？」
と強く言ってしまうこともあった。

母自身も聞こえにくさは実感していたが、耳鼻科に行くことをためらっていた。あとで聞いた話だが、母は耳鼻科で補聴器を勧められることに不安があったようだ。補聴器を使うことで周りから変な目で見られないか、子どもである私達に対しても、補聴器を使う母の姿を見て悲しい気持ちにさせてしまうのではないかという心配もあったという。

母は特に電子音や子どもの声など高い音が聞こえづらいと感じていることが多かった。保育教諭として働いている母にとって今

後の仕事に支障が出る可能性が出てきた。そこで、思い切って耳鼻科を受診してみることにした。

診察の結果、母は補聴器を試すことになった。母がつけた補聴器はとても小さく、近くで見ないと装着していることに気づかないほどだった。補聴器を装着していることを目立たなくしたいという母にとっては、最適なものだった。しかし、目立たない分、聞こえづらいことに気づかれにくく、聞こえずに困っているときなどにすべに気づいてはもらえないというデメリットもあると感じた。

補聴器を受け取った翌日、母は初めて職場に補聴器をつけて出勤した。補聴器をつけている人と一緒に働くということでは職場の仲間に嫌な思いをさせてしまうのではないだろうか、目立たないとはいえ、補聴器をつけていることで特別な目で見られるのではないかといった不安な気持ちで出勤したようだ。しか

し、職場の方たちからは

「困ったことや聞こえにくいと思ったらいつでも言ってね。」

「一緒に働きやすい環境を作っていこうね。」

と優しい言葉をかけてもらえたそうだ。周囲が温かく受け入れてくれたことで母も気持ちが楽になり、職場でも安心して補聴器を装着して働けるようになった。この経験から私は「困ったときに声を掛け合い、支え合う仲間がいる環境」がいかに大切かを学ぶことができた。そういった仲間や、困ったときに寄り添ってくれる仲間が傍にいて、補聴器をつけた人はもちろん、何らかの困りを持った人も安心して働くことができるようになると思う。

母が補聴器をつけることになって、私が普段耳にしている音が難聴の人にはどのように聞こえているのかが気になり、調べてみることにした。すると、音がぼんやりとしか聞こえない、音は聞こえるが何と話しているのかわかりづらい、高い音が全く聞こえないなど、不自由と感ずることが多々あることを知った。母もそんな不自由な世界で生活してきたのだ。そんな不自由な世界の中にいる母に対し、耳が聞こえにくいことを責めるような言い方をしていた自分を強く反省した。

補聴器をつけることをためらっていた母だが、少しずつ聞こえる音が増え、世界が広がってきているように思う。そんな母の姿を見ると、改めて、「補聴器は耳の聞こえが悪い人にとっではなくてはならないものだ」と実感することができる。補聴器と聞くと、まだまだ「年寄りに見える」とか、「耳が聞こえない人」というようにマイナスなイメージがあるけれど、目が悪い人がメガネをかけることに対して「普通」と思うのと同じように、耳の聞こえが悪い人も隠すことなく堂々と補聴器をつけられるような社会に早くなってほしいと思う。

母が補聴器を使用する事で、障がいには目に見えてわかるものと、目に見えないものがあることに気づいた。この経験から、目には見えなくても相手の気持ちや困りを想像して配慮することの大切さを学ぶこともできた。これからは一人ひとりの違いを受け入れ、困っている人に気づいたら優しく声を掛けるなど、誰もが安心して暮らすことができる社会づくりを、自分自身から少しずつ始めていきたいと思う。そのため、まずは一番身近な母が困っているときには私が母の耳となって支えていけるようになりたいと思う。

共に生きる社会

あの日のスイミングの時間は、私にとって忘れられない時間となった。それは、一人のダウン症候群の彼との出会いが人権に対する意識を大きく変えるきっかけとなったからだ。

あの日、私は週一回のスイミングのレッスンに行っていた。準備運動を一齐に始めた時だった。プールサイドで準備運動を行っていた彼の姿が目に入った。少し不器用な動き、周りの子どもたちとは異なるどこか幼い表情。彼はダウン症候群という障がいをもっていたのだ。準備運動が終わり、私は泳ぎ始めようとしていた。その時、彼が私の前に並んだ。彼は、コーチの指示を受けながら、ゆっくりとプールに入っていた。彼が泳ぎ始めた瞬間、私の顔に「ビシヤッ」と多量の水がかかった。それは、彼の強いドルフィンキックで生まれた水しぶきだった。正直な気持ち、最初は軽く迷惑だと感じた。もう少し周りのことを気にかけてほしいと思った。しかし、あることに気づいた。それは、二十五メートルや五十メートルを泳ぐとき、彼はいつも全力で泳いでいるということだ。「迷惑」という先入

観で見ていた私は、すぐにはその全力の泳ぎに気づくことができなかつた。いつも全力で泳ぐという事は、当たり前のように思われるが、実際そう簡単にできることではない。そして、彼はコーチの指示の下、段々と上達していくのがわかった。その姿を見て、私は胸が熱くなった。彼は障がいとともに生きながら、目標に向かって懸命に努力していた。そんな彼の努力を認められるようになってから、私の中で「迷惑」という気持ちは消え去り、「尊敬」という気持ちへと変わっていった。しかし、周りから、「早く違うレーンに入ってほしい。」「あいつ、変だな。」といった言葉が私の耳に入ってきた。私は、「えっ？」と思いつつも、どうすればいいのかわからず、ただ見ていることしかできなかった。正義感と無力感が同時に押し寄せてきた。その日の帰り道、プールサイドでの出来事が気になってしょうがなかつた。何もできなかった私も軽はずみな言動をとっていた彼らと似たようなものだと思ひ、深く心の中で反省した。傍観者は、何も言わなければ、その行為を認めたことになる。

傍観者の立場の人間が、「やめようよ。」と注意しなければ、差別はなくならないと実感した。

それから私は、障がいをもつ人に対する差別について深く興味を持つようになった。家に帰っても、彼の姿が頭から離れなかった。私はインターネットでダウン症候群について調べてみた。すると、ダウン症候群は染色体の異常によっておこる疾患であること、知的発達の遅れや特有の身体的特徴があることなどがわかった。改めて調べてみると、想像以上に多くの困難を抱えながら生きているという事を知ることができた。同時に、ダウン症候群の人たちが、私たちと同じように、喜びや悲しみを感じ、自分の人生を精一杯生きていることも理解できた。調べた上でもう一度、彼の姿を思い浮かべると、どんな練習も諦めずに目標や夢に向かって何かに取り組むという姿は、本当に勇敢で格好よく、簡単にはなれない姿だと実感した。もしも、私が彼と同じ立場に立っていたとしたら、あんなにひたむきに努力できるだろうか。私は彼に心無いことを言っていた人たちがいたことで、未だに障がいのある方に対する偏見や差別が残っていると痛感した。そんな世の中で彼のよつに生き生きと、そしてのびのびと活動していかうことができるだろうかと考えさせられた。

最終学年になり私は、バスケット部のキャプテンを務めていた。

部員全体をまとめるキャプテンという立場は難しく、悩むことも多々あった。経験豊富な後輩とうまくいかずに、二年間続けてきた部活を本気でやめようと考えたことがあった。さらに、受験生としての勉強や進路についても悩むことがあり、全て諦めかけていた時だった。そんな時、ふと彼の姿が頭に浮かんできた。「諦めない強い志」その姿が私を踏みとどまらせた。

プールでの経験を通して、障がいをもつ人たちに対する見方が大きく変わったと思う。「人権とは、誰もが生まれながらに持っている権利であり、決して奪われることのないものだ。」

私たちは、障がいをもつ人たちと共に生きる社会を築いていく必要があると、彼との出会いを通して痛感した。「共に生きる社会」をこれからも実現していくために、私たち一人一人が障がいをもっている方に対する正しい知識と理解を深め、偏見や差別をなくしていく努力をしていかねばならない。そして、あつてはならない差別を目にした時、一歩立ち止まり、勇気をもって、「その言葉は相手を傷つけていないか、共に歩いていく仲間として考えようよ。」と言える人になっていきたいと思った。

心をつなぐ思いやり

祖父が難病指定の病気になり、車椅子の生活を送っている。車椅子に抵抗があった祖父は、ぎりぎりまで自力歩行していたが、歩行が少しずつ困難になってきたため、仕方なくといった感じだった。

私たち家族も車椅子はシヨックだった。昔のように、元気に歩く祖父の姿を知っているだけに、車椅子が必要だと知ったときは、どうしたらいいのかわからないほど戸惑った。車椅子で生活するとなると、今まで当たり前だと思っていた道やお店がとても大きな壁のように感じた。事前に、バリアフリーかどうかを調べたり、駐車場の広さを気にしたりと、考えることが山積みで、正直気が重くなることばかりだった。

今年の夏、旅行好きの祖父が四国への旅を望んだため、私たち家族も同行した。四国への移動手段としてフェリーを利用したが、その時の出来事が私にとって「バリアフリーとは」を考える貴重な機会となった。

乗船時、祖父が身体に障がいをもってしていることを伝えると、

私たちは優先的に案内された。また、本来であれば階段の上り下りや長い移動が必要となるはずが、車を乗船口に最も近い場所に駐車させていただき、客席までの最短ルートを確認してくれた。船内では、階層間をスムーズに移動できるよう、エレベーターやスロープが設置され、車椅子での移動を妨げないよう、通路の段差が極力少なくなるように工夫されていた。また、私たちが客席に着くと、一人のスタッフに

「何かお困りのことがありましたら、いつでもお申しつけください。」

と声をかけていただいた。

祖父がトイレに行く準備をして車椅子に乗ろうとしていたら、船が大きく揺れ身体がふらつき危なかったが、すぐにスタッフが駆け寄り、手助けをしてくれた。下船の際も、船の揺れやタラップの状況に応じて、安全な移動をサポートしてくれた。そのおかげで、祖父の身体的負担は最小限に抑えることができた。

今回のフェリーでの体験は、バリアフリーという言葉が単なる設備の改善にとどまらず、たくさんの人々の心遣いと行動によって実現されることを教えてくれた。

祖父は、車椅子を利用して嫌な思いはしたことがないが、車椅子を利用されている方にとって、周囲の理解不足は大きなストレスになると聞いた。それは、設備や制度の問題だけではなく、人々の意識や行動によって起こることが多いため、より深く感じる問題だ。

例えば、車椅子で通ろうとしている通路に自転車や荷物が放置されている。悪気があつて置いてあるわけではないかもしれないが、車椅子の利用者にとってどれほど障がいになるのか想像できないのであろう。自転車や荷物があつても少し避ければ済む問題だが、車椅子を利用する人にとっては、その「少し避ける」ことが、大きな困難になるという想像が難しいのだ。

そして、心無い言葉や態度によって、深く傷つくことがある。例えば、エレベーターを譲ってもらえなかったり、混んでいる時は舌打ちされたりすることもあるそうだ。このような経験は、個人の尊厳を深く傷つけ、社会から孤立していると感じさせる原因になりかねない。しかし、このような問題は、誰もが直面する可能性のあることだ。

祖父が車椅子を利用することになり、一緒に行動すると、歩

くことが難しい人にとって車椅子は自分の意志で好きな場所へ行き、活動するための欠かせない存在だと感じた。それは、利用する人にとって、車椅子は身体の一部であり、足であり、生活そのものだからだ。

祖父が周囲のたくさんの方から、思いやりをいただいているのを間近で見て、私も心から感謝をしている。私は、祖父との関わりを通して、バリアフリーや車椅子を利用することがどういふことなのか、深く考えるようになった。今まで気づかなかったが、世の中には困っている人が沢山いてその人たちへの思いやりの気持ちがどれほど温かいものかを知ることができた。車椅子は、その人の自由な行動と自立した生活を支えている。祖父が受けた思いやりを、今度は私が誰かに返せるようになりたい。



作文を掲載させていただいた方（あいうえお順）

青木 あおき
翔 かける
（南大分中学校）

澤田 さわだ
双葉 ふたば
（田尻小学校）

永田 ながた
愛緒 まお
（城南中学校）

安部 あべ
陽登 あきと
（碩田学園）

多賀 たが
巨志 こうし
（東大分小学校）

中村 なかむら
優斗 ゆうと
（滝尾中学校）

安部 あべ
恭平 きょうへい
（日岡小学校）

多賀 たが
慎之助 しのすけ
（東大分小学校）

橋本 はしもと
紗良 さら
（明野北小学校）

池永 いけなが
愛果 まなか
（津留小学校）

高橋 たかはし
崇史郎 しょうしろう
（田尻小学校）

平塚 ひらつか
穂花 ほのか
（滝尾小学校）

太田 おおた
栞名 かなな
（明野東小学校）

高橋 たかはし
怜音 れん
（吉野小学校）

深町 ふかまち
栞里 しおり
（荏隈小学校）

大塚 おおつか
瑛陽 えい
（神崎小学校）

武石 たけいし
和磨 かずま
（鶴崎小学校）

南曲 みなまがり
美音 みお
（大分大学教育学部附属中学校）

小野 おの
栞奈 かなな
（津留小学校）

靈鷲 たまわし
凧 なぎ
（日岡小学校）

森田 もりた
朝陽 あさひ
（明野西小学校）

釘宮 くぎみや
陽香 はるか
（鶴崎中学校）

寺戸 てらど
奏翔 かなと
（明野中学校）

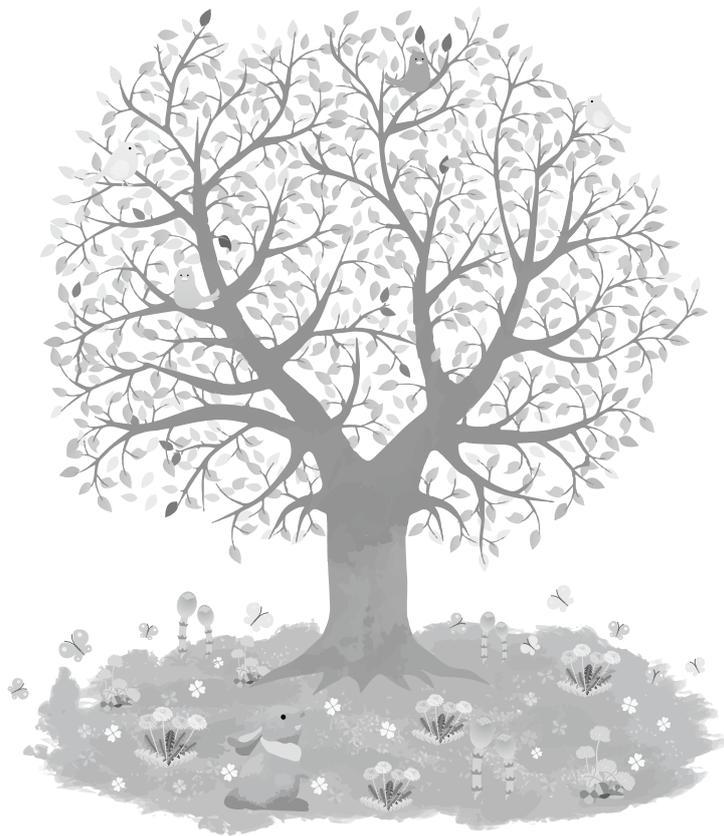
釘宮 くぎみや
晴大 はると
（鶴崎中学校）

道野 どうの
友絃 ゆいと
（大在西小学校）

佐藤 さとう
柚月 ゆづき
（明野中学校）

中尾 なかお
友星 ゆうせい
（佐賀関小学校）

人権標語の部





小学校 低学年の部

ちよつかいは けんかのもとだ ださないよ

宮崎 みやざき
敬太 けいた
(春日町小学校)

ごめんねと 素直に言える 君が好き

幾留 いくどめ
悠斗 はると
(八幡小学校)

ともだちと ちがっていいよ すてきだね

江藤 えとう
寿哉 かずや
(別保小学校)

みんなとは ちがう自分も 大すきだ

倉永 くらなが
栞花 かんな
(長浜小学校)

だれだって だれかのだいじな たからもの

佐藤 さとう
莉子 りこ
(豊府小学校)

ありがとう こころぽかぽか うれしいね

石井 いしい
将生 まさのぶ
(津留小学校)

考えて その子の笑顔 本物が

宮川 みやかわ
岳 がく
(春日町小学校)

そのままで きみはきみだよ だいじょうぶ

永田 ながた
絢士 あやと
(大道小学校)

ごめんなさい きもちをごめて なかなおり

田並 たなみ
玄啓 はるあき
(大道小学校)



小学校 高学年の部

ありがとう あなたのおかげで がんばれる

佐藤 さとう 苾 しん
(森岡小学校)

私だけ？ それって個性 すてきだよ

柳井 やない 遥香 はるか
(明野東小学校)

ともだちに ちいさなひかり とどけたい

安東 あんどう 柚希 ゆずき
(戸次小学校)

変わろうよ 見ているだけの 自分から

山田 やまだ 凌翔 りおと
(南大分小学校)

にじいろの 個性が輝く みんな星

祐東 ゆうとう 奏太 かなた
(津留小学校)

いらないよ 人を比べる 天秤は

古賀 こが 真衣 まい
(宗方小学校)

私色 君色合わせて にじ色に

辛島 からしま 依澄 いずみ
(豊府小学校)

かけてない 差別の眼鏡 無意識に

麻生 あそう 実紀みのり
(判田小学校)

君らしさ その個性は 宝物

西村 にしむら 煌史 こうじ
(碩田学園)



中学校 高等学校の部

ありがとう 笑顔が増える 愛言葉

田染 心菜 (上野ヶ丘中学校)

ありがとう 目と目で伝える この気持ち

山本 鈴桃 (滝尾中学校)

その言葉 鏡の自分に 言ってみて

山崎 理一 (判田中学校)

「それいいね」 きみとわたしの ちがうこと

佐藤 蒼衣 (大東中学校)

つなぐなら SNSより 心の輪

八重樫 祐衣 (判田中学校)

違う色 豊かな社会を 築く鍵

日野 結翔 (大分豊府中学校)

反らした目 あなたはほんとに 無関係?

栗本 真帆 (大東中学校)

だいじょうぶ 君のそばには みんないる

仲村 健介 (坂ノ市中学校)

「ちがうこと」 それがぼくらの 「共通点」

寺北 桂志郎 (碩田学園)

世界中 多様な個性で 彩る地球

佐藤 嘉人 (大分東明高等学校)

無関心 その静けさが 痛み呼ぶ

大野 幹太 (大分東明高等学校)

踏み出そう 傍観者から 防止者へ

板井 優樹 (大分東明高等学校)

人権ポスターの部



優秀作品



小学校の部



みんな だいすき
なが しま あり あ (金池小学校)
長 嶋 利 阿



みんな なかよし
まき ほのか (日岡小学校)
牧 穂乃香



たすけあい
いし かわ ゆい (豊府小学校)
石 川 結 惟



ありがとうの花
 はら たけ き 帆 (松岡小学校)
 原 武 希 帆



えがおになれる まほうのことば
 あ なみ りの は (日岡小学校)
 阿 南 莉望羽



こまった時はいつでも聞くよ
 こ とう ふう り (西の台小学校)
 後 藤 風 凜



友だちをたいせつに
 わた なべ み く (佐賀関小学校)
 渡 邊 美 久



ふわふわことばは あいことば
にい がみ ゆき の
 新 上 倅 望 (日岡小学校)



未来へとどけ わたしたちのこせい
いし ぼし な お
 石 橋 奈 和 (城南小学校)



みんなのいいところ みつけよう
まき なお き
 牧 尚 樹 (寒田小学校)



空よりも広い心を大切に
み うら ゆう な
 三 浦 侑 奈 (日岡小学校)



性別を決めつけなくて！
 かわの瞳とわ羽（日岡小学校）



みんなは みんなの宝物
 あだちなおたけ（日岡小学校）



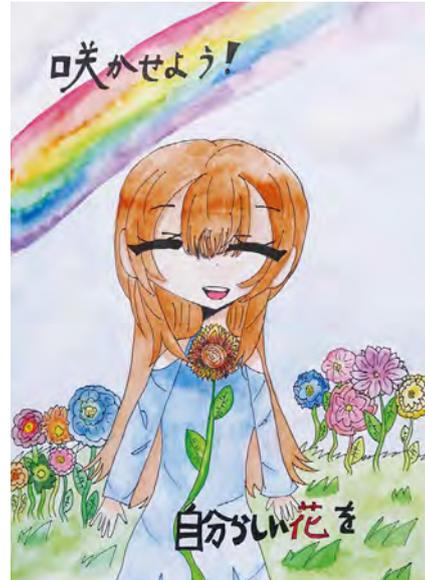
ひとりじゃこげない ブランコもある
 ひらいわみりな（長浜小学校）



みんなの花を咲かせよう
 まきはなか（東植田小学校）



みんなの笑顔が つながる世界
 まき ゆい な
 牧 由依奈 (日岡小学校)



咲かせよう! 自分の花を
 にの みや か のん
 二 宮 海 音 (春日町小学校)



戦争と平和
 いし ぐろ だい ち
 石 黒 大 智 (丹生小学校)

優秀作品



中学校の部



好きなものを言える世界に
にし ほん かに くれん
西 原 佳 蓮 (大東中学校)



自分の好きな自分でいよう
たか ぎ りつ か
高 木 律 香 (鶴崎中学校)



いじめをするの誰の得？
くり ぼやし
栗 林 みのり (坂ノ市中学校)



色んな人がいてこそ世界
 おやまだ わたる
 小山田 航 (大東中学校)



一人一人のハート
 おかもと
 岡 本 まどか (城東中学校)



みんな同じじゃない
 うえだ ゆめ
 上 田 優 芽 (坂ノ市中学校)

おおいた人権フェスティバル2025

人権作品集

発行 二〇二六（令和八）年二月

編集 大分市教育委員会社会教育課

TEL 五三七一五七二二

